

# 長崎で平和祈る

## えがお新聞

発行元

うべカ旅  
このの和  
の贈理和  
の寄贈理杏  
の八木梅杏  
の八天野清  
の八天野清

### 平和の旅に中高生4人

被爆者の治療用機器購入のために組合員から寄せられた「平和のカンパ」を長崎原爆病院に届け、原爆や戦争、命の尊さなどを考える「長崎『平和のカンパ』



「平和の旅」が、8月20日から一泊二日で実施され、中高生4人が参加しました。長崎大学核兵器廃絶研究センターの林田光弘研究員らと被爆地を訪問。長崎原爆病院では、昨年の「平和のカンパ」で購入したがん細胞を調べる顕微鏡についての説明を受けました。

この旅には、次世代に「平和」をつないでいく取り組みとして「平和のカンパ」が活用されています。【旅程】1日目 長崎原爆資料館 原子爆弾落下中心地碑 平和公園 2日目 山里小学校 如己堂 浦上天王堂 山王神社 長崎原爆病院

倍だったことになりました。爆風で崖下に滑落した鐘楼の一部は、現在も当時のまま残されていました。鐘楼を見て爆風のすさまじさを感じる事ができました。頑丈な教会を一瞬で吹き飛ばしてしまった原爆は、本当に恐ろしいと思いました。（天野清香）

### すさまじい爆風 想像を絶する原爆の威力



8月21日に訪問した浦上天主堂は、双塔の高さが26mある大きな石レンガの教会です。爆心地から約500mに位置し、原爆投下で秒速280mもの爆風が襲いました。丈夫な教会

でしたが、正面の壁だけを残してほとんど壊れてしまいました。電柱が倒れたり、走行中のトラックが横転したりする風の強さが秒速40mとされるので、爆風はその7

### 被害の恐ろしさ わが身で想像を 体中に刺さるガラス片

原爆の被害が想像できますか？ 熱線でガラスが溶け、樫の木に無数の欠片が刺さった遺物を見ました。爆風の圧力は6・7と11トンもあったそうです。台風では物が飛ばされてガラスが割れますが、原爆は爆風だけで窓を粉々にしました。その破片が自分の体に刺さるのを想像してください。これが現実起こったというのを忘れないでほしいです。（八木理和）

# えがお新聞

発行元

うべカ旅  
の和杏  
贈理柚  
平和贈理  
寄贈柚  
長崎八木  
ンバ八木  
八梅八木  
天野

## 未来への伝承考える

### 全校生で被爆伝える山里小

皆さんは、命についてどう考えますか？ 私は長崎で原爆や戦争について学びました。その中で、長崎市立山里小学校の取り組みを知りました。

山里小は爆心地から北へ約700mの場所にあり、

校内を案内するのが伝統なのだそうです。

児童1500人のうち1300人が亡くなるなど甚大な被害を受けました。そんな山里小は現在、学校の一部が資料館となり、原爆の歴史を伝え続けています。そして、山里小では、高学年の児童が訪れた人たちに

子どもたちが体験したことのない原爆について語り継いでいるのです。現代を生きる者が自分たちの言葉で原爆を知らない人に伝えていく。山里小の活動はとても重要なことだと思いました。（八木理叡）



## 被爆樹木と同世代の行動に学ぶ

長崎に原爆が投下され、被害をうけたのは人間だけではありません。植物や動物をも大きな傷を負いました。その一つに被爆樹木が挙げられます。

長崎には50本もの被爆樹木があり、これらは爆心地から4キロ圏内で被爆し



### 平和のキャンパス 贈の旅を終えて

伝えたい旅の学び

◆原爆を自分事を感じるようになった。同年代の人が動き、他者に思いを伝えていた。私も旅で学んだことを周囲に伝えていけたらと思います。（八木理叡）

◆長崎の歴史や地形を知ることによって当時の状況が分かり、原爆のもたらしたものを深く理解できた。旅の学びを身近な人々に伝えていきたいです。（八木理和）

◆放射線やキリスト教への理解不足による差別を知った。今もSNSのデマで差別やいじめがある。情報の正しい理解は大切だと感じました。（天野清香）

◆原爆の悲惨な結果について深く理解し、平和の重要性を再認識した。復興の努力を知り、私が享受する平和の重みをひしひしと感じました。（梅谷柚杏）

たものを指します。原爆の爆風や熱に耐え、被爆樹木たちは79年もの間、その形をとどめながら原爆の脅威を私たちに伝え、命の尊さを語ってくれています。

また、地元の中学生の皆さんは「平和大使」として、世界に原爆の恐ろしさと

や核の廃絶を訴え続けています。自分と同年代の人間が、己のためではなく、今を生きる人やこれから生まれてくる人、原爆を知らない人々のために行動していきます。私も自ら、他者に大切な何かを伝えていきたいと思えます。（八木理叡）

## えがお新聞

発行元

うべカ旅  
この和杏香  
贈理柚香  
平寄木梅八天  
崎八木谷八野  
長八野

## 奪われた日常



この写真は昭和20年5月、軍需工場に力もく女子寮の落成式に際して特に撮影が新されたものであり、ここに展示中の「焼けたお弁当」の持ち主であった。女子寮（当時市立高等女学校3年生）も友人と一緒に写っています。（前列左から3番目）  
（写真提供：上田優子氏）



## 食べられなかったお弁当

その日、親が愛情を込めて作ったお弁当は、食べられないことなく真つ黒な炭となってしまう。原爆が投下されるなどは、誰も想像していなかったでしょう。親は、子どもが学校

で笑顔で友人とお弁当を広げ、友人を思い描き、また夕方には「おかえり！」と、笑顔で子どもに声をかけることを願っていたに違いありません。しかし、原爆投下の瞬間、そんな親子の幸せな日常と未来は奪われたのです。あの時、子どもはお弁当の中身を知っていたのだろうか。この親子は生きて再会できたのだろうか。その疑問に答えを出せる者は存在しません。戦争は、親子のささやかで温かな日常さえも一瞬にして奪い去ってしまったのです。

真つ黒に焼け焦げたお弁当のご飯粒は、戦争の残酷

さをただ静かに物語っていました。  
（梅谷柚杏）

あの日を語る大地  
食器が伝える「失われた暮らし」

地層の中から発掘された数々の食器を見ました。その持ち主は、どんな人だったのだろうか。その人はどのような生活を送っていたのだろうか。そして、どんな運命をたどったのか。食器が土に埋もれた光景から、かつての日常が遠い過去に消え去ってしまったように感じられました。

しかし、その食器が使われていたころの生活を想像してみると、どこか不思議で、切ない気持ちになります。この食器は、戦争のために突然、断ち切られた日常を切り取ったものであり、過去に生きた人々の存在をとて身近に感じさせてくれます。  
「あの日を忘れるな」と、語りかけてくるかのよう。  
（梅谷柚杏）

# 祈りの声を聞く

## えがお新聞

発行元

うべカ旅  
の和杏  
贈理柚  
平寄木  
崎八梅  
長八天

永井隆博士について知っていますか。永井博士は放射線外科医で、診察の時に使用する放射線によって白血病を患った後、寝たきり状態で平和や命の大切さを著書で訴え続けた人です。

病床をヘレンケラーが見舞ったそうです。永井博士の娘の茅乃さんが9歳の時にヘレンケラーに書いた絵と手紙が展示されていました。茅乃さんは疎開していたため、被爆を逃れまし

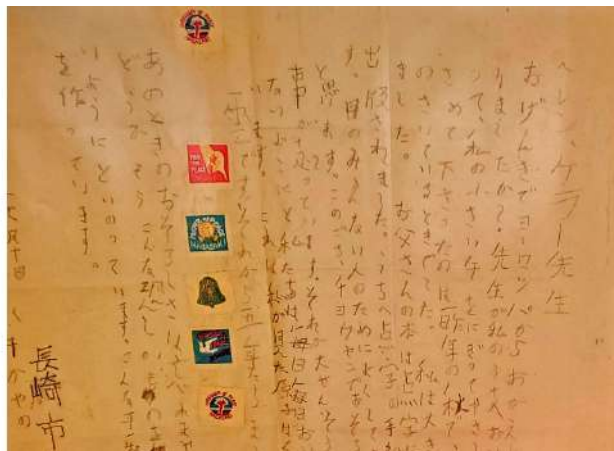
### ヘレンケラーに訴えた少女の絵



た。絵には、原爆の象徴であるきのこ雲が色とりどりに描かれていました。原爆の暗いイメージを払拭し、明るい前向きな気持ちで頑張ろうと考えたのかもかもしれません。最後に「どうかもうこんな恐ろしいものを使わないように」といっています。私と、書かれていました。私

## 被爆者を襲った流言

広まる偏見で二重の苦しみ



たちより小さな子が訴えていました。皆さんにも原爆

について考えてほしいと思います。（八木理和）

原爆は被爆者の身体だけではなく、心までも深く傷つけました。爆心地に近い浦上はキリスト教が多く住む場所でした。市役所や県庁があつた市街地は比較的被害が少なく、長崎が被害を受けたのは敵国の宗教であるキリスト教を信仰する人のせいだという誤った考えが広まりました。

放射線の影響を知らない

人々は、急に髪の毛が抜け、血を吐くなどの被爆症状はキリスト教を信仰した罰だと考えました。ケロイド等の原爆症は感染するという誤情報に加えて、「被爆者は罰を受けたキリスト教だ」という偏見で二重の差別を受けたため、被爆者は自身の体験を語るまで長い長い時間がかかったそうです。（天野清香）